捨てられた腐瞳は龍に拾われ幻想を識る

万死万別

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

予言は二つあった、一つは生き残った子の。もう一つは、
龍《ドラゴン》の因子を持つ者の
これが、また魔法界を揺るがすきっかけとなるのだった。

目次

真の親との出会い　1
博識の少女　5
手紙と来訪　9
客とむすめ　14

真の親との出会い

ある寒い夜の森の中で

「小僧、そこで何をしている?」

上を見上げたらそこには、龍《ドラゴン》がいた。

ちょっと、待って別にふざけてないからね、実際そうとしか言えない存在が目の前にいるんだもん。　は?もんとかキモい?俺も思った。でもそこまで変じゃないんだよ。だって俺まだ五歳になったばかりだから。　え?じゃあ何でそんなところにいるのかって?それは、

ーーーーー回想ーーーーー

僕、いや俺が五歳になった記念に家族は、初めて（家族は、妹を連れて何回かいっている。）旅行に連れていってくれた。場所は、ロンドン?とか言う場所、そこでいっぱい遊んだ、、、妹が。　え?俺?俺は、ホテルでほぼ監禁状態でしたが何か?これが普通なんでしょ?妹がいる家庭は。　??違うの?まぁ、いいや、それで、夜になって帰って来て妹が寝たのを確認して俺を外に連れ出して遊んでくれると思ってついて行ったら急に意識無くなって気が付いたら森の中、、、マジなんでこうなった。俺ちゃんと言うこ

と聞いてただろ、ハ、ハハハハハハハハハハハハ、、
おっと失礼、まだ心の整理がついてなかったみたいだ。
ーーーーー回想終了ーーーーー
とう言うことがあってここにいる、さてそろそろ返事をした方がよさそうだ。
「道に迷ってます。」
「ふむ、捨て子か？」
「いえ、一回もそんなこと言ってないんですけど」
「あゝ、言ってないさこころをよんだんだからの。」
嘘だろ。
「本当じゃよ。」
、、、ふぅ、良しＯＫ！　心が読めるのは分かった、で？　捨て子だとして俺をどうするんだ？
「信じてないの？、、、まぁ、よかろう。ちょうど今、　素質のある者を育てようと思っておってな、そんなところに丁度小僧が来たんだ、よって小僧、お前を育てることにした。」
、、、は？あんた、何言ってんの？俺を育てる？え、
あんた可笑しいんじゃないか、俺は、捨てられたんだ！

理由？多分、この腐った目とへんな力だろう、、だから、こんな俺を拾って育てる？捨てられた俺を？あんたバカなんじゃないのか！

「うるさいのぉ　あんた　あんたと儂はあんたと言う名ではないわい、儂の名は、オーディン・カオスロギアと言う良く覚えておくんじゃな、小僧お前の親になる者の名をのぉ」

俺は、小僧じゃないハチマン？だ！

「それは、捨てられる前の名じゃろうて、、そうじゃのぉ、、ハチ、、八、、8、、うーむ、、‼？おお、エイトなんてどうじゃ？」

話を聞け！このジジぃ龍《ドラゴン》

「それでのぉ、さっきの話の続きなんじゃが、エイト、お主の変わった力なんじゃがな？魔法使いと呼ばれる者が子供の頃に良く起こすものなんじゃ、もちろん儂も良くした、腐った目？龍《ドラゴン》の儂に言わせれば普通じゃ普通それにのぉ今は、腐っとると言うより夜空の様な綺麗な腐瞳じゃよ。、、だからのぉエイト儂の息子にならんか？」

「、、な、何でそんなこと言うんだよ。お、れ、俺はいらない子なんだ、だからこのままここで」

「エイトよ、お前はいらん子ではない、儂が必要としている。それにのぉ未来ではたくさんの者がお前を必要としている、だからのぉエイト死んではならんぞ。」

「グスッ、、グスッ、、ウッ、、ウッ」
「泣きたい時は、泣きなさいここには儂しかおらんからの」
「ウッ、、ウワーーーーーーーーー
「すみません、みっともないところを見せました。」
「良い、良い、それでのぉ、改めて、、、エイト、、、儂の息子にならんか？」
「あゝ！よろしく頼む、親父！」

これは、腐瞳で龍《ドラゴン》に育てられた者の英雄章
生き残った子と赤毛の少年、博識の少女との青春が今、始まる

博識の少女

　親父と出会って早数年、親父とは3年しか居られなかったが、その間に、親父の全てを教えてもらいそれを出来るようにした。
　そして、親父が残した遺言で俺は親父を取り込み自分の一部にした。
　そして今、俺はぶらぶらとイギリスの街を散歩している。
（そういや、親父に言われて一緒に一年間旅でて　、そん時迷子になって仲良くなった子がいたのってこの街やったな、確か名前は、、、、）
「ハーマイオニー・グレンジャー」
「何？」
　急に、直ぐそばで声がして、振り向くと、そこには見知った顔があった。
「うおっ!!」
「キャッ!?何よ！ビックリするじゃない?!」
「いやな、直ぐ横に顔があったからつい、久しぶり、、、ハーミー」ニコッ
「／／／　久しぶり、、エイト　／／／」
「（顔を真っ赤にして怒っている、やっぱりイヤだよな、俺に名前呼ばれるの、それにし

ても、久しぶりに会って、、ますます可愛くなったな」
「／／／かっ可愛いいって／／／」ゴニョゴニョ
「ん？なんか言ったか？」
「、、何も言ってないわよ!!エイトのバカ!!」
「なんで!?」
　数分後
「そういや、さっきなんで？俺の横にいたんだ？」
「別に、そこら辺ぶらぶらしてたら見知ったアホ毛が見えたから近寄って見たら、私の名前が呼ばれたから横にいただけよ？それが何？」
「いや別に、特に何もないが、、（覚えてもらっていて、嬉しいなんて恥ずかしくて言えんな」
「（言ってんじゃない。）」
「そういえば、なんでここに来たの？」
「特に理由があったわけじゃないんだが？強いて言うなら、お前に会うため？」
「なんで疑問形なのよ。でも、嬉しいわ、ありがと／／／」
「おう／／／」
　顔を背ける

「フフッ」
「／／／」
（やっぱ、こいつだは、、、親父）
「ハーミー」
「何？」
「コレやるよ。」ポイッ
　と言って物を渡す
「これ、何よ？」
「、、、指輪？、、、／／／」　カァー
「／／／　えっと、、、これって？　／／／」
「御護り、それと、、、昔の約束の印　／／／」
　ー回想ー
「おっきくなって、もういちどあったら、永遠にいっしょにいよう」
「ええ、永遠に」
　ー回想終了ー
「覚えててくれたのね♪」
「まぁな、それに親父との約束でもあるからな」

「だから、これからは、永遠に一緒に居よう」
「えぇ、永遠に」ニコッ
　親父、、これでいいよな、、俺が大切だと思った女には、印となる物を渡せってやつ、、
俺ちゃんと大切な奴護るからさ、、見守っててくれよな、、親父！
（どうしてこうなった？良く考えなくてもコイツらまだ十歳にもになってないんだよなぁ）ｂｙうｐ主
　この時点で九歳の夏

手紙と来訪

8月8日

ハーマイオニーと、付き合って1年が経った。あの後ハーマイオニーの両親には挨拶をして俺が、養子になるなら世間体的にも大丈夫だと言われた。元々、ハーマイオニーから約束のことは聞いていたらしくて直ぐに許可してもらえた。それに、俺の親代わりになりたいと言ってくれた。

そして、今、俺は親父と旅をして作ったコネクションで会社を立ち上げた会社にいる、理由?今日が俺の誕生日だと言う事で午前は会社でパーティーということなったからである。ちなみに午後はハーミーの家で家族団欒のパーティーだ。

そして、午後

「エイト!誕生日おめでとう。」

「おめでとう、エイトくん」

「エイト君、おめでとう」

「ありがとう、ハーミー。ありがとうございます、父さん、母さん」

「敬語はいいと言っているのに、そう言えば、エイト君とハーミーに手紙が来ていたよ。」
「ありがとうございい・・・ンンッ、ありがとう。父さん。
はい、ハーミーのやつ。」
「ありがとう、エイト。」
手紙が入った封筒を受け取り黄色味がかった封筒を見た。
コバルトブルーカラーで宛名が書いてある。
イングランド
グレンジャー邸
エイト・C・グレンジャー様
封筒を開けなかの手紙を見る。
【上部】
ホグワーツ魔法魔術学校
校長　アルバス・ダンブルドア
マーリン勲章、勲一等、大魔法使い、魔法戦士隊長、
最上級独立魔法使い、国際魔法使い連盟会員
【下部】
拝啓

親愛なるグレンジャー殿

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は九月一日に始まります。八月三十一日まで必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

追伸

魔法関連は、初めてだと思いますので、後日そちらに、案内として向かいます。

副校長　ミネルバ・マクゴナガル

とこのように書いてあった。

そして誕生日から数日経ったある日。

ハーミーと、朝食後のドリンクタイムを楽しんでいると

チリーン

と、チャイムが鳴りハーミー飲んでいた紅茶を置いてが玄関にかけて行く。

ちなみに、父さんと母さんは仕事に行っていて俺たちは学校を少し早いが特例で卒業しているので時間が余っている。
俺は会社があるが、基本的に家で出来る仕事しか渡されていない。
そんなことを考えていると少し玄関の方が騒がしくなったので、ちょうど飲んでいた紅茶がカップから無くなったので行ってみる。
、、ん？ＭＡＸコーヒーじゃ無いのかって？
それに？まず有るのかって？
有るぞ、つか、我が社が作っている。それに、魔法界では人気商品の一つだ。
製造権？
それも、我が社がに有る。
何故かって？
そんなの、初めに作ったのが我が社、、、俺だしな。
っとこんな話をしてるんじゃなかった。
ちなみに、俺は朝は気分で紅茶かマッコー、昼はマッコー1択、夜は紅茶で、ハーミーは朝は紅茶、昼はマッコーかブラック
極端？
ハーミー曰く疲れた時はマッコーで、特に何もない時はブラックらしい。そして、夜

は紅茶だ。おっ、そんなこんなで玄関に着いた。（この間、僅か５秒）
玄関に着くと如何にもな服装の妙齢な女性が立っていてハーミーと話していた。
というよりハーミーが魔法について色々と聞いているみたいだった。
「ハーミー、」
「あ！エイトどうしたの？」
「どうしたのじゃねぇよ。ハーミー。興味があるのはわかるが少し捲し立てすぎだ。まだ、名前すら聞いてないんだろう？」
「う、」
「興味のある事には突っ走っていくのはハーミーの良いところでもあり悪いところでもあるんだからな。」
「はい、」シュン
「さて、う、うん。失礼しました。Ｍｒｓ。名前も聞かずに捲し立てるようなことをしてしまい申し訳ない。」
「すみませんでした。」
「まずは、中にお入りください。話は、それからで。」
「ええ、そうですね。では、上がらせていただきます。」
そう言って妙齢の女性を中へ案内する。

客とむすめ

妙齢の女性をリビングに連れてきてさきほどまで飲んでいた紅茶新しく出したカップに注いで出した。
「ありがとうございます」
「いえ」
「ん、美味しいですね、この紅茶。」
「うん、やっぱり美味しいわ。エイトの入れてくれた紅茶。」
「ありがとうございます。あと、ハーミーやっと落ち着いたみたいだな。」
「さっきは、ごめんなさいエイト、余りにも嬉しかったから。」
「ああ、気持ちは分かるからいいけど、さて、すみませんお待たせしました。Ｍｒｓ、、」
「マクゴナガルです。エイト・Ｃ・グレンジャー、ハーマイオニー・Ｃ・グレンジャー」
「それと、アリシア・Ｃ・グレンジャーはどうしたのでしょうか？」
「ん？アリシアですか？手紙は届いていませんでしたけど。」
「はい、ただ、手紙に関してですが、彼女はまだ誕生日が来ていないので手紙が来ていな

いだけです。」
「そうなんですか。」
「そういや、まだ寝てたな。起こすか。」　パチンッ　指を鳴らす
ドタドタドタと2階の音室から聞こえてくる
「冷た！、、ウワァァァァァァァァァァァン！寝過ごしたぁぁぁぁぁぁ、今日、義父様達と行く魔法学校の先生が来るのにィィィ」
　と聴こえてくる。
「義父様達と行くって、なんで知ってるのかしら？」
「ああ、俺が教えたしな。」
「って、エイト知っていたの?!」
「まあ、予想は付いたしアリー（アリシアの略名）は義娘とはいえある事情によってなった同い年だしな。」
「あら、アリシア・C・グレンジャーはあなたたちの娘なのですか？あなた達夫婦の事は知っていましたが娘までいたんですね。？」
「義理ですけどね。それに俺らと言うより俺が特殊ですし。アリーも少し特殊な事情もありますし。それより、よく俺たちが夫婦と分かりましたね。一様、外には、婚約者で俺が養子縁組したことになっているんですけど。」

「まぁ、ここの来る前に魔法省によってきましたのでそこで少し事情を知っている方に聞きましたから。」
「そうなんですか。」
「おはよ～、義父様～義母様～」
「「おはよう。アリー（アリシア）」」
「聞いてよ～義母様～義父様ったら寝てる私に魔法で出した氷、服に入れてきたんだよ～」
「それは、仕方ないと思うわ。だって、アリシア、あなたいつまでも寝ているんですもの。それより、魔法学校の先生来てるんだから挨拶しなさい。」
「はぁ～い、初めまして、魔法学校の先生、私はアリシア・Ｃ・グレンジャー、義父様と義母様の義娘様です。長いのでカオスロギアのところは言わなくてもいいですよ。これからよろしくお願いします。」
「そう言えば、俺達も自己紹介がまだでしたね、先生が先に知っていたので失念していました。さて、ご挨拶が遅れました。私は、エイト・Ｃ・グレンジャー、最賢の龍、オーディン・カオスロギアを義父にもち、今はＣ・Ｒ・Ｈの会長をしています。どうぞよろしく。」
「妻のハーマイオニー・Ｃ・グレンジャーです。」

「まぁ！これはご丁寧に、ホグワーツ魔法学校、副校長をしています。ミネルバ・マクゴナガルです。しかし、エイト・グレンジャーには驚かされてばかりですね。まさか、あのオーディンの息子で魔法界でも有名なあの会社の会長とは、」
「それで、今日は、義父様達の手紙にも書いてあった通り道具とかを買いに行くんですよね～マクゴナガルせんせ～」
「ええそうですよ、アリシア・グレンジャー、まぁ、必要はあったかどうかわかりませんでしたけでね。」
「そんなことありませんよ、先生！エイトは違いますが私たちは魔法界に行くのはこれが初めてなんですから。」
「そうなんですか、ハーマイオニー・グレンジャー、、長いですね。名前で呼んでも？」
「「もちろん。」」
「それでは、そうなんですか？ハーマイオニー？」
「ええ、先生、アリシアと私は魔法界に入ったことがないんです。それに、エイトが、こうゆうところで繋がりが出来るのだからつれてってもらいましょって、」
「そうですか、では、そろそろ時間もいい頃合ですし、行きましょうか。」